

タイの木材事情

荒谷 明日児

タイといえばビルマとならんでチークの本場として世界的に有名であり、20年前の1960年には米、ゴム、スズに次いで、チークが主要輸出品目の第4位を占めていた。また南部の熱帯常緑林から生産される Yang (*Dipterocarpus alatus*) も戦前から有名であった。従来からのこのようなイメージと、この国が熱帯地域に位置することから、タイは一般に森林の豊富な国として考えられている。しかし、現実には木材の輸入国で国内消費量の1/4を外国からの輸入に頼っているのである。

本稿ではこのようなタイの木材事情について、その現状とともにその背景についての概略を述べてみたい。なお本稿はFAO: Forests and Forestry in Thailandを参考としたほか、昨年末に海外林業コンサルタンツ協会が行なったタイの造林調査に同行した際の調査によるものである。タイは北緯5°~20°、東経97°~105°に位置している。国土面積は51.4万km²で、一般にチャオブラヤ(メナム)デルタを中心とする中部、チェンマイ盆地を中心とする北部、コラート高原の東北部、マレー半島の南部に区分される。1983年における森林面積は15.6万km²で、国土面積の30.52%を占めている。

国土が南北に長いことから、森林の類型も多様で、主に熱帯常緑林(35%)、山地常緑林(12%)、針葉樹林(0.4%)、マングローブ林(1%)、混交落葉樹林(19%)、落葉フタバガキ科林(33%)に区分される。このうち商業的に重要なのは熱帯常緑林、混交落葉樹林、落葉フタバガキ科林である。落葉フタバガキ科林が北部、中部、東部、東北部と南部を除くほぼ全域に存在しているのに対して、熱帯常緑林は東部、東南部、南部に多く、チークを混交する混交落葉樹林は北部全域と中部に分布するなど、主要森林地帯は中部のチャオブラヤデルタをとりまく山岳地帯と南部に存在している。

現在(1983年)の森林面積は15.6万km²で、国土面積の30.52%を占めるが、1961年には27.4万km²(55.3%)であり、わずか22年間に11.8万km²、24.8%の森林が失われた。なお1950年の森林率は56%とされていることからすると、タイの森林は1960年以降、急速に減少したことがわかる(表-1)。

ARAYA, Akihiko: Timber Market Situation in Thailand
日本木材備蓄機構

表-1 森 林 面 積

	土地面積 ¹⁾ km ²	森 林 面 積		ランドサット	
		1961 ²⁾		1973 ³⁾	
		km ²	%	km ²	%
北 部	169,644	116,275	68.54	113,595	66.96
南 部	70,715	29,626	41.89	18,435	26.07
北 東 部	168,854	70,904	41.99	50,671	30.01
中 部	67,399	35,660	52.91	23,970	35.56
東 部	36,503	21,163	57.98	15,036	41.19
全 国 計	513,115	273,628	53.33	221,707	43.21

注) 1) 陸地測量部, 2) 航空測量, 3) ランドサット 1, 4) ランドサット 2,
5) ランドサット 2, 6) ランドサット 3

1960年代からの森林の急減には、いくつかの要因が考えられる。ひとつはタイの経済成長に伴う木材需要の増大、また山岳地帯の焼畑と高原地帯での無断耕作、そして盗伐である。

木材需要については後に述べることとして、初めに焼畑、無断耕作、盗伐についてみておきたい。

森林類型が多様なことから利用樹種も様々で数多いが、1983年の生産量が 10,000 m³を超えるものを示すと次のとおりである。

<i>Dipterocarpus</i> spp.	397,018 m ³	<i>Dipterocarpus grandiflorus</i>	26,130 m ³
<i>Xylia kerrii</i>	143,450	<i>Lagerstroemia calyculata</i>	21,253
<i>Shorea obtusa</i>	72,726	<i>Hopea odorata</i>	18,946
<i>Tectona grandis</i>	54,838	<i>Syzygium cuminii</i>	13,033
<i>Anisoptera</i> spp.	59,275	<i>Hopea ferrea</i>	12,738
<i>Shorea gratissima</i>	49,225	<i>H. avellanea</i>	12,399
<i>Pterocarpus</i> spp.	42,062	<i>H. latifolia</i>	
<i>Afzelia xylocarpa</i>	32,946	<i>H. pierrei</i>	
<i>Rhizophora mucronata</i>	33,188	<i>Sandoricum koetjape</i>	10,715
<i>Rh. apiculata</i>		<i>Dillenia</i> spp.	10,693
<i>Dipterocarpus tuberculatus</i>	29,009	<i>Michelia champaca</i>	10,042
<i>Irvingia malayana</i>	28,775		
<i>I. oliveri</i>			

経済成長にともなう木材需要の増加とともに、人口増加にともなう農業用地開発は森林の減少に大きな影響を与えた。農業用地開発はゴム、カシュー、園芸作物等の合法的なプランテーションによるものと、焼畑、無断耕作といった非合法的なものに区分できるが、このうち森林の減少に大きく影響するのは、後者の焼畑、無断耕作である。

の 変 化 (1961～1982)

調 査 に よ る 森 林 面 積					
1976 ⁴⁾		1978 ⁵⁾		1982 ⁶⁾	
km ²	%	km ²	%	km ²	%
102,327	60.31	94,937	55.96	57,766	51.73
20,139	28.47	17,603	24.89	16,442	23.25
41,494	24.57	31,221	18.49	25,886	15.33
21,826	32.38	20,426	30.31	18,516	24.47
12,631	34.60	11,037	30.24	8,000	21.92
198,417	38.67	175,224	34.15	156,000	30.52

出典: Forestry Statistics of Thailand, 1983

タイでは国土面積の12.6%は焼畑もしくは焼畑跡地であり、また年間250,000～300,000 haの森林が焼畑の対象にされ、森林内で行なう Forest farmer は全人口の13%にもものぼるといわれるが、これには無断耕作も含まれるものと思われる。焼畑は主として北部および一部東北部の山岳地帯で、山岳少数民族を中心に行なわれていたが、最近では山岳少数民族以外によるものも多くなっている。人口の少ない時代においては、焼畑は十分な休耕期間をとりながら小面積を耕作していたが、最近では年5%ともいわれる山岳少数民族の人口増加と土地なし農民の侵入で、焼畑面積も増加してきている。このため森林資源への影響はもとより、急傾斜地での耕作から土壌流失の問題などもおきている。

これに対して、無断耕作は主として高原地帯の森林で行なわれるもので、やはり北部および東北部に多くみられ、東北部では全面積の1/3以上を占めているとさえいわれる。この無断耕作は、チャオプラヤデルタの米作地帯への商品経済の浸透で、下層農民が一部は工業地帯へ労働者となるとともに、一部が北部、東北部の高原地帯の国有林を無断で伐採し、開墾しているものである。最近ではカンボジアからの難民流入も手伝って拡大してきている。この無断耕作にも二種類あり、ひとつは土地無し農民が自給自足のため行なっているもの、他は土地無し農民等を労働者として雇って投機的に行なうものである。後者はキャッサバ、トウモロコシといった輸出用換金作物や豆類、疎菜類、トウガラシといった国内向け換金作物の栽培が主体となっている。自給自足型の無断耕作の場合は一耕作2～3 haであるが、投機型の無断耕作では100～1,500 haにもものぼるといわれる。

焼畑農民、無断耕作農民が森林を切り開く際に使う火の不始末は、山火事となって広大な森林を破壊する。タイの雨期(5～10月)、乾期(11～4月)は、ボルネオ等のように雨の多い少ないによって決まるのではなく、雨のあるなしによって決まる。このため、彼等が農作業に備えて火入れをする乾期の終りごろには、山火事になること

が多く、また山岳地帯では農閑期でもある乾期に、狩猟のために火入れをするということもあり、山火事はタイ林業にとっての強敵となっている。チークの場合、下草に火が入っても5年以上であれば被害はなく、むしろ結実を促進するともいわれるが、5年生以下であると被害を受ける。下刈りは山火事被害の防止からも重要な問題である。

盗伐もタイの森林を減少させた大きな原因のひとつであるが、チークが貴重材として世界的に有名になったことから盗伐も激しくなり、さらには木材供給不足から他の樹種にもおよぶようになった。タイでは、盗伐量が統計上の丸太生産量の2倍にものぼるため、正確な丸太生産量の把握は不可能であるといわれる。盗伐がいかに激しいものかをみるために、1974年の盗伐量を推定した例を紹介しよう。この年の製材工場の丸太消費量は520万 m^3 (540万 m^3 ともいわれる)、人力製材および杭など丸太のままでの利用量が130万 m^3 であったことから丸太の総需要量は650万 m^3 となるが、この年の丸太供給量は統計上わずか280万 m^3 にしかならなかったのである。

盗伐が発見された場合、盗伐材は国に没収され、競売に付されるが、1983年に競売に付されたものはチーク材3,346 m^3 、非チーク材35,660 m^3 で、統計上の丸太生産量と比べても、発見、没収されるのは盗伐材のうちごく一部にすぎないといえよう。タイにおいては焼畑、無断耕作、盗伐は単に林業のみの問題ではなく社会問題となっているのである。

表-2 丸太生産量の推移 (単位: m^3)

年	チーク	非チーク	合計
1957	187,691	1,399,205	1,586,896
1960	153,664	1,111,690	1,265,354
1970	233,942	1,851,906	2,085,848
1971	298,869	1,915,958	2,214,827
1972	177,934	1,978,110	2,156,044
1973	188,441	2,001,211	2,189,652
1974	254,273	2,511,457	2,765,730
1975	216,169	2,873,632	3,089,801
1976	263,700	2,946,729	3,210,429
1977	298,820	3,096,680	3,395,500
1978	—	—	2,547,218
1979	179,600	2,921,100	3,100,700
1980	97,300	2,446,900	2,544,200
1981	73,200	1,725,300	1,798,500
1982	58,100	1,711,300	1,769,400
1983	58,200	1,729,900	1,784,100

出典 1957~1978: Forests and Forestry in Thailand (FAO) 1980
 1979~1983: Forest Statistics of Thailand (Royal Forest Department) 1983

この国では木材は重要な資源で、住宅建築、造船、農業用荷車、農器具、枕木、杭などにも用いられるほか、燃料としての薪、炭の需要も無視できない。丸太生産量は統計上でみると、1960年の126万 m^3 から1977年の340万 m^3 へ214万 m^3 、270%の増加を示した。このうちチーク材は1960年の15万 m^3 から1971年の30万 m^3 へと増え、その後減少したものの1977年には30万 m^3 へと再び増加した。非チーク材も1960年の111万 m^3 から1977年には310万 m^3 にまで増加したのである（表-2）。

このような丸太生産量の急増は、タイ経済の発展とも大きく関係していることは明らかである。タイの経済は、1960年の産業投資奨励法、1962年の新産業投資奨励法、そして1961年から始まる一連の経済開発計画によって急速に成長した。また、1960年代のベトナム戦争特需も大きな影響を与えている。国内総生産（GDP）の年平均成長率は、第1次経済開発6カ年計画で8.1%、第2次経済開発5カ年計画で7.5%、第3次経済開発5カ年計画では6.2%となっている。

経済開発にともなう木材需要の増大は国内における丸太生産量だけではまかないきれず、木材輸入を促進し1972年には木材輸入量が木材輸出量を上回るという現象となって現われた。その後、国内への供給確保と資源の保護、そして盗伐防止を目的として1973年のチークおよびその他貴重樹種の丸太製材品（厚さ6"以上）の輸出を禁止したことから、木材輸入国としての体質が定着したのである。

このように急増を続けた丸太生産も、1980年代に入ると急減する。すなわち1979年の310万 m^3 から1982年の177万 m^3 、1983年の182万 m^3 へと大きく減少するのである。このような丸太生産量減少の要因としては、タイの経済成長が1980年代に入り低迷し始めたこともさることながら、これまでの焼畑、無断耕作、盗伐による森林面積の減少、森林資源の潤滑化と、1972年以降、治安上から国境地帯での森林の伐採が禁止されたことが大きな要因となっている。この国境地帯での伐採禁止によって、341のエリアが閉鎖された。昨年、政府はこのうちの48エリアについて、基本的に伐採を許可したが、この作業再開許可も試験的なものにすぎないといわれている。

表-3 丸太および製材品の需給バランス（単位： m^3 ）

年	生産量 (1)	輸入量 (2)	輸出量 (3)	推定消費量 (4)=(1)+(2)-(3)	自給率 (1)/(4)
					%
1971	2,214.8	77.1	107.7	2,094.2	105.8
1977	3,395.5	320.2	84.3	3,631.4	93.5
1978	2,547.2	1,527.6	26.2	4,048.2	62.9
1979	3,100.7	1,033.1	7.7	4,141.5	74.9
1980	2,544.2	434.3	1.5	2,980.0	85.4
1981	1,798.6	566.7	7.8	2,357.5	76.3
1982	1,769.4	488.5	1.5	2,256.4	78.4
1983	1,819.7	614.3	1.2	2,432.8	74.8

出典：前掲書

表-3は木材（丸太、製材品）の生産量，輸入量，輸出量から消費量を推定したものであるが，これによると輸入量の増大と輸出量の減少，そして自給率も1971年の輸出超過から1977年の94％へ，さらには最近の75％へと減少傾向を示していることがわかる。また丸太，製材品別の輸出入バランスを1983年についてみると，丸太は輸出631 m³に対して輸入229,155 m³，製材品は輸出562 m³に対して輸入385,144 m³となっているのである。

しかし，このような国内における丸太生産の増加と木材輸入の増加も，タイの製材工場の稼動にとっては十分ではなかった。王室森林局によると，1959年には1,637の製材工場がライセンスを発給されており，このうち機械化された工場は678であったが，1960年に製材工場の新設を認めなくなったものの，1965年には520にまで減少した。またライセンスを発給されている工場の中でも，丸太の入手難から操業していないものが多く，操業していてもその稼動率は低い。政府は年間180日以上操業しない工場については，ライセンスの延長を認めないことを決定したが，これは木材価格を押し上げ，他の代替品との競争力を弱めることになった。

従来，木材はチークを中心にしてタイの主要輸出品目のひとつで，チークは1960年には米，ゴム，スズに次いで第4位，総輸出額について4.1％の割合を占めていた。しかし，最近では輸出禁止政策の実施によってその地位は全く低下し，1981年をみると総輸出額1530億バーツのうち，わずか7,000万バーツという凋落ぶりである。

最近の木材の主要輸出先をみると，1978年は輸出量7,654 m³の70％をアメリカ，1980年は1,549 m³の50％を台湾，1981年は7,797 m³の90％を中国，1982年，1983年はそれぞれ1,464 m³，1,159 m³の90％，96％を日本に向けるなど，輸出先は一定しておらず，しかも一国で50％以上も占めているのが特徴的である。

また，主要輸出樹種としては，チーク（製材品）の他に，Yang (*Dipterocarpus*)，Pra-du (*Pterocarpus indicus*)，パラゴムなどがあげられる（表-4，5）。

表-4 丸太製材品の樹種別輸出（1983）

金額：バーツ

樹 種	丸 太		製 材 品		計	
	m ³	金 額	m ³	金 額	m ³	金 額
針 葉 樹	631	927,308	—	—	631	927,308
Pra-du (<i>Pterocarpus</i>)	—	—	20	568,053	20	568,053
Wood agilla (<i>Aquilaria</i> , 沉香)	—	—	1	45,950	1	45,950
Para rubber	—	—	541	2,561,568	541	2,561,568
そ の 他	—	—	—	4,992	—	4,992
計	631	927,308	562	3,180,563	1,193	4,107,871

出典：Forestry Statistics of Thailand 1983

表-5 木材の樹種別輸出

金額: 1,000バーツ

樹 種	1979		1980		1981		1982		1983	
	m³	金 額	m³	金 額	m³	金 額	m³	金 額	m³	金 額
Teak	6,407	118,240	3,244	5,004	46,036	1,14	—	—	—	—
Ma-klua (<i>Diospyros</i> , 青 黒檀)	—	—	—	—	2,021	18,575	—	—	—	—
Yang (<i>Diptero-</i> <i>carpus</i>)	149	580	204	946	321	1,976	339	1,666	—	—
Pra-du (<i>Pterocarpus</i>)	400	4,746	—	—	74	1,731	6	594	205	68,053
Para rubber	250	436	1,246	5,714	269	1,722	1,064	5,828	541	2,561,568
Pa-yung (<i>Dalbergia</i> ,) (紫檀)	338	1,203	—	—	—	—	—	—	—	—
Sa-ya (<i>Shorea</i> Light red meranti)	—	—	28	396	—	—	—	2	—	—
Ki-lek (<i>Cassia</i> , タガ ヤサン)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Kra-bark (<i>Anisoptera</i>)	7	20	1	5	2	16	1	5	—	—
針 葉 樹	—	—	—	—	—	—	—	—	631	927,388
Wood agilla (<i>Aquilaria</i> ,) (沉香)	—	—	—	—	—	11	—	—	1	45,960
そ の 他	103	544	65	422	106	357	53	301	—	4,992
計	7,654	125,769	1,549	7,727	7,797	70,424	1,464	8,410	1,193	4,107,871

出典: 前掲書

表-6 丸太製材品の樹種別輸入量 (1983)

金額: パーツ

樹 種	丸 太		製 材 品		計	
	m³	金 額	m³	金 額	m³	金 額
針 葉 樹	3,533	31,463,049	—	—	3,553	31,463,049
Teak	4,944	46,414,573	2,245	30,137,315	7,189	76,551,888
Ta-bak (<i>Terminalia</i>)	20	375,517	—	—	20	375,517
Kra-bark (<i>Anisoptera</i>)	—	—	2,660	8,263,338	2,660	8,263,338
柱・杭 類	2,693	9,675,645	—	—	2,693	9,675,645
そ の 他	217,965	623,202,409	380,239	1,480,905,715	598,204	2,104,108,124
計	229,155	711,131,193	385,144	1,519,306,368	614,299	2,230,437,561

出典: 前掲書

表-7 木 材 の 年 次 別,

樹 種	1978		1980	
	m ³	金 額	m ³	金 額
Teak	5,174	37,294	304	3,160
Yang (<i>Dipterocarpus</i>)	7,587	17,126	2,058	6,103
Ta-bak (<i>Terminalia</i>)	171	502	1,427	5,921
Kra-bark (<i>Anisoptera</i>)	3,403	8,270	4,477	13,801
Daeng (<i>Xylia</i>)	1,252	5,274	202	854
Takien (<i>Hopea</i>)	694	2,674	186	712
Sa-ya (<i>Shorea</i> -Light red meranti)	13,391	41,830	6,000	17,400
針 葉 樹	12,661	26,830	16	280
Pra-du (<i>Pterocarpus</i>)	215	882	338	1,478
Teng and Rang (<i>Shorea</i> -Selanga batu & <i>Pentacme</i>)	403	1,089	134	512
そ の 他	988,159	1,794,067	419,209	1,075,787
計	1,033,110	1,935,838	434,351	1,126,008

出典: 前掲書

これに対して、輸入は1981年には総輸入額2,190億バーツのうち18億バーツと、全体の0.8%を占めている。樹種別には、多くはマレーシア、インドネシアからのYang, Kra-bark(*Anisoptera*) などであるが、針葉樹も丸太でわずかではあるが入るほか、総輸入量の1%に満たないとはいうもののビルマからチークの輸入もある。また、丸太、製材品別には総輸入量614,299m³のうち、丸太229,155m³(37%)、製材品385,144m³(63%)と製材品輸入が丸太輸入を大きく上回っている(表-6, 7)。

このような輸入の拡大も、国内の木材加工工場の需要を充たすものではなく、丸太

表-8 製材工場とその他の加工工場数

工 場 別	工 場 数
製材工場	440
〃 (人力によるもの)	100
木 工 所	2,891
〃 (人力によるもの)	1,090
合板工場	14
単板工場	13
フェイバーボード工場	2
パーティクルボード工場	3
バークет工場	55

出典: 前掲書

樹 種 別 輸 入 量

金額: 1,000ペーヅ

1981		1982		1983	
m ³	金 額	m ³	金 額	m ³	金 額
—	—	816	7,328	7,189	76,552
538	1,667	4,926	12,307	—	—
196	815	—	—	20	376
1,924	5,969	6,695	20,330	2,660	8,263
57	239	—	—	—	—
18	77	—	—	—	—
7,060	23,120	—	—	—	—
—	—	—	—	3,533	31,463
22	96	—	—	—	—
400	1,030	—	—	—	—
565,361	1,739,728	476,015	1,653,100	600,897	2,113,784
575,576	1,772,741	488,452	1,693,065	614,299	2,230,438

の入手難は続いている。製材工場については、従来の国産材を利用した時代の水路に近い位置から、輸入材の搬入に有利な陸路に近い位置へと変っているが、440ある工場（人力によるものを含めると540工場）のうち、稼動出来ないものもあり、また操業率も低いという状況は変っていない（表-8）。

合板、単板については、初めての工場が1957年に建設され、現在は合板14工場、単板13工場が存在している。しかし、製材工場と同じように丸太の入手難から操業率

表-9 木 材 加 工 品 生 産 量

種 目	単 位	1979	1980	1981	1982	1983
合 板	1,000m ³	74.2	88.7	106.1	160.4	164.8
単 板	1,000m ³	22.2	22.5	19.8	14.5	22.4
ハードボード	1,000m ³	30.8	29.6	41.9	30.6	35.0
パーティクルボード	1,000m ³	6.5	8.7	9.0	28.2	32.9
薪	1,000m ³	825.2	635.7	643.0	857.2	772.5
炭	1,000m ³	418.0	234.2	256.9	340.7	291.9
木質タール	1,000 l	1,861.7	954.8	749.5	1,391.1	590.8
樹 皮	t	2,502.9	1,283.9	320.6	316.3	145.3
ラタン	t	3,152.6	2,320.2	505.4	385.6	2,924.0
竹	100万本	75.5	58.1	63.2	52.9	45.1

出典: 前掲書

表-10 木 材 加 工

種 目	単位	1979		1980	
		数 量	金 額	数 量	金 額
合 板	kg	1, 177, 789	7, 101	486, 213	5, 549
単 板	m ³	8, 411	289, 697	6, 805	269, 464
ブロックボード	kg	124, 510	1, 591	784, 842	5, 853
パーティクルボード	kg	416, 251	11, 529	553, 273	19, 968
ハードボード	kg	6, 206, 758	24, 110	5, 848, 015	28, 250
ソフトボード	kg	—	—	—	—
ファイバーボード	kg	27, 400	131	54, 028	581
薪	kg	2, 000	32	—	—
木 炭	kg	32, 026, 282	31, 199	39, 742, 609	49, 174
パケット	kg	8, 252, 459	170, 197	4, 829, 339	141, 244
木製家具	個	4, 173, 302	420, 069	4, 045, 213	397, 582
	組	1, 039, 897		2, 350, 534	
その他木製品	個	814, 974	566, 036	3, 094, 160	716, 566
	kg	13, 175, 770		14, 229, 640	
計			1, 521, 692		1, 634, 231

表-11 木 材 加 工

種 目	単位	1979		1980	
		数 量	金 額	数 量	金 額
合 板	kg	998, 051	9, 242	595, 706	6, 807
単 板	m ³	5, 069	5, 047	85	2, 395
ブロックボード	kg	12, 966	247	30	2
パーティクルボード	kg	78, 441	3, 494	238, 877	6, 943
ファイバーボード	kg	2, 101, 020	25, 693	1, 574, 893	23, 379
薪	kg	347	7	427	6
木 炭	kg	487, 019	696	2, 035, 529	5, 619
パケット	kg	—	—	—	—
木製家具	個	4, 108	2, 662	8, 932	6, 151
	組	1, 311		2, 306	
その他木製品	個	17, 496	50, 318	450, 735	45, 514
	kg	2, 896, 023		3, 680, 397	
計			98, 906		96, 816

品 輸 出

金額: 1,000バーツ

1981		1982		1983	
数 量	金 額	数 量	金 額	数 量	金 額
621,761	5,584	1,026,897	6,614	33,997	881
5,858	266,922	5,811	300,348	6,699	368,998
2,089,730	10,774	295,195	1,492	37,310	1,512
349,272	17,105	459,927	20,856	341,285	10,321
5,444,391	29,614	6,962,131	37,125	10,805,314	55,548
—	—	32	11	—	—
329,843	3,222	28,787	3,747	31,056	1,026
5,000	9	82,242	352	—	—
51,342,753	63,767	64,744,257	83,837	70,283,227	94,026
3,787,748	122,806	2,450,095	83,869	2,665,883	74,855
2,660,761	371,820	5,162,798	438,999	2,509,526	504,774
1,793,141		1,283,413		1,382,689	
658,725	789,191	1,089,597	730,294	490,507	690,528
13,151,609		12,304,622		11,315,515	
	1,680,814		1,707,544		1,802,467

出典: 前掲書

品 輸 入

金額: 1,000バーツ

1981		1982		1983	
数 量	金 額	数 量	金 額	数 量	金 額
842,793	12,177	1,156,114	17,402	1,196,461	21,462
408	11,659	923	14,182	156	3,266
—	—	56	6	32,000	224
856,967	12,344	822,069	12,956	360,510	7,961
1,483,924	24,502	839,425	13,531	1,426,352	21,707
780,135	135	280,895	57	243,130	48
2,640,005	4,169	5,430,317	8,583	7,459,741	11,731
—	—	—	—	690	41
63,904	11,481	11,693	6,137	79,835	9,378
4,825		3,823		9,209	
45,735	35,940	6,807	37,483	3,117	34,380
1,247,772		1,117,838		1,347,663	
	112,407		110,337		110,198

出典: 前掲書

は低く、合板工場の場合 30～40%程度である。国営のタイプライウッド社でも、1983 年に利用した材の 40%を国産材、60%を輸入材に頼っており、また同社は自社保有のコンセッションの伐採とともに造林も行なっている。

1983 年の加工品生産量は合板 164,800 m³ で、木質ボード生産量の 64%を占めるほか、単板 22,400 m³ (9%), ハードボード 35,000 m³ (14%), パーティクルボード 32,900 m³ (13%) となっている。また 1979 年から 1983 年までの輸出入バランスをみると、単板が輸出超過となっているほかは輸入超過であり、木質ボードの生産も基本的には内需向け中心である (表-9, 10, 11)。

最後に、森林面積の減少と森林資源の涸渇が、生活に必要な薪炭の需給にも大きく影響している点についてみておきたい。タイのエネルギー消費構造は、石油 80%, 電力 (水力発電) 9%, 石炭 2.5%のほか、薪炭、稲わら、バガスが 8.5%を占め、石油の比重が大きい。しかし、一部の生活、特に農村部においては薪炭が重要なエネルギー源で、タイ全体でも調理用燃料の 75%は薪炭によっているといわれる。最近、これら薪炭生産が減少傾向にあり、薪の生産は 1977 年の 106 万 m³ から 1981 年の 64 万 m³ に、炭の生産は 29 万 m³ から 26 万 m³ になった。このため価格上昇は著しく、バンコクで 1977 年に 6US\$/m³ であった薪が現在 20 US\$/m³ に、炭も 0.14 US\$/kg から 0.26 US\$/kg にまでなった。

しかし、この薪炭生産量は盗伐によるものを含まないため、全体の消費量の 39%にすぎないとの試算もある。一説によると、タイの調理用の炭の需要は 6 人家族で 1 回 1 kg、薪に換算して年間 0.913 m³ に相当するといわれているが、統計上の薪生産量を世帯数 (総人口/6) で割ると 1977 年で 0.144 m³, 1981 年 0.078 m³ となり、いずれにしても需要が供給を大きく上回っていることがわかる。

以上みてきたように、タイにおいては国境地帯での伐採禁止という問題もあるが、森林面積の減少、森林資源の涸渇化から、丸太生産量は最高時である 1977 年の半分にまで落ち込み、消費量の 25%を輸入に頼ってもなおかつ加工工場の需要を満たしていない。このような状況が盗伐をさそい、さらに森林を荒廃させるという悪循環におちいつている。政府としても森林の荒廃は社会問題であるとの観点から、アグロフォレストリーを利用した Forest village を導入して、Forest farmer の定着と造林の促進に力を注ぐとともに、エネルギープロジェクトを発足させて、早生樹種の造林を行なうなどしている。しかし、ことが造林であるだけに実績が出るのはまだ先のことで、当面は輸入を拡大しない限り、このような状況はこれからも続くのではないと思われる。